

◎東京新聞

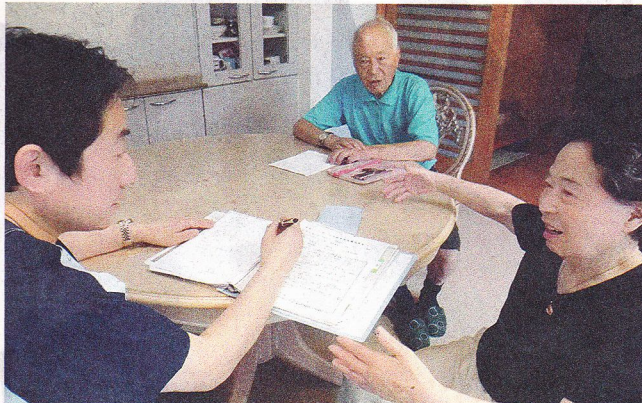


便秘のケア

当院の患者の平均年齢は、八十五歳と高齢です。複数の疾患を抱えますが、加えて、いろいろな症状を訴えます。中でも便秘は比較的多い症状です。下剤を内服することが多いのですが、いくつか種類があり、病態で使い分ける必要があります。高齢者は口からものを食べたりの飲んだりする量が少なく、歩行などの運動量も減ります。排便時には腹圧をかける必要がありますが、腹筋も減っているのです。きばることができ

自然な排便をサポート

排便の状況を探る



ず排便しにくい状況にあります。薬や疾患が原因の場合もあり、これらの可能性を取り除く必要があります。たとえば、大腸がんなどの場合、便が出にくいと思っているうちに腸が詰まってしまつ「腸閉塞」が起こるので、早めの検査や治療が必要です。

す。特殊な病気ですが、涙や唾液が減少する「シェーグレン症候群」でも便秘になります。この場合、腸管から分泌される水分も減少するので、便が硬くなります。

Aさんは、脳卒中の後遺症で半身まひがあります。便秘を訴えるようになり、刺激性の下剤を多用するようになりました。最初は効果がありました。内服量が増えました。

ある時、腹部が張って排便が困難ということまで往診に向かいました。普段はベッドの傍らの簡易トイレで排便するのですが、今回はなかなか自力で出せません。かん腸をして排便することで、ようやく排便できました。

Aさんのように、まひのある患者は便秘を訴えるケースが多いです。残された身体機能をなるべく使いながら、トイレで座るといった自然な方法で排便するケアが必要です。

(川崎高津診療所院長)

|| 次回は八月十三日掲載